

『勇気と寛大な心を持って出かけて行きなさい』
「ミッション 2030」－祈りを深める

ニューズレター 2 月号

ミッション 2030

と

祈りを深めるセミナー

2018 年 3 月 7 日発行

1. はじめに:

2 月 14 日(日)、2017 年度最後の祈りを深めるセミナー「ミッション 2030 のふりかえりと展望と使命(ミッション)について」がマリア聖堂で開かれ、120 名近くの方々が参加されました。

「ミッション 2030」を支える 4 本柱各グループからの報告があり、そのあと英神父が使命(ミッション)について話をされました。以下その要約です。

2. 「ミッション 2030」のふりかえり:

1) 「祈りを深める」グループ:

「ミッション 2030」のスタートに当たる今年度は、4 本柱のひとつ「祈りを深める」にフォーカスし、神との交わりを深めていくことができるようにいくつかのアクションプランを企画、実施しました。主なものは次の通りです:

- ミサの共同祈願 4 番目の祈りを唱える:
ことばの典礼の最後に唱える共同祈願は信徒がすべての人のために祈るものです。そしてその 4 番目の祈りはそこに集まった共同体のための祈りです。毎月テーマを決めそのテーマに沿った祈りを主日のミサで唱えてきました。来年度以降も続けていきます。

また毎月第 3 金曜日の夜の聖体礼拝でも毎月の祈りを黙想しました。
- 祈りのカード:
毎月の祈りとその祈りに基づく「朝の祈り－恵みを願って一日を始めよう」と「晩の祈り－今日一日をふりかえってみよう」を記した「祈りのカード」を作成して配付しました。またこのカードは日本語だけでなく、英語、スペイン語の各グループが訳を作りそれぞれのグループで祈られました。祈りのカードは来年も継続されます。
- 祈りのセミナー:
2017 年 5 月から 2018 年 2 月まで、8 月と 12 月を除いて 8 回、祈りのセミナーを行い

ました。講師は英神父が 7 回務められ、特別編をケルクマン神父が 1 回講演されました。各回のテーマは次の通りです：

2017 年 5 月：「『ミッション 2030』が目指すもの」

6 月：「神との生きた交わりを深めるため」

7 月：「家族と祈り—家族とのかかわりを見つめなおす」

9 月：「平和とエコロジーを大切にする生き方」

10 月：「わたしたちの活動と働きについて」

11 月：「みことばに学ぶ『正しい価値観と心の自由』」（特別編）

2018 年 1 月：「召命—神の呼びかけ」

2 月：「ミッション 2030 のふりかえりと展望と使命(ミッション)について」

- リビング・ロザリー：

リビング・ロザリーとは、一人ひとりの参加者がロザリオの珠になり、祈りを唱えていく祈りの集まりのことです。5 月(マリアさまの月・5/28)と 10 月(ロザリオの月・10/29)の最後の日曜日に主聖堂で開催しました。英語、スペイン語、ベトナム語、タガログ語、日本語の各語圏の信徒が集まり各々のことばで 1 連ずつ祈りを唱えていきました。

10 月の集まりからは各言語圏の若者の代表に実質的運営を任せました。参加者はほぼ全員が若者でした。日本語圏からはワールドユースデーとアジアンユースデー派遣メンバー、高校生会、教会学校リーダーなどが参加しました。

現在、英語圏の若者を中心とした共同体「インターナショナル・ユース・ミニストリー」が積極的に教会活動をしていますので、2018 年度からは彼らと各言語圏の若者リーダーを中心に運営していきます。そして「ミッション 2030」の 4 本柱のひとつ「生きた共同体グループ」がサポート役になります。

- 秋の教会黙想会：

11 月 23 日(水・祝)の教会黙想会は上智大学文学部史学科の川村信三神父に指導をお願いしました。川村師は専門がキリシタン史なので「キリシタン時代に学ぶ教会生活のありかた」として、「ミッション 2030」を深めていくために、キリシタン禁教前と後の信仰のありかたについてお話いただきました。午前の部では「高山右近時代の教会のありかた」、午後は「潜伏キリシタン時代の教会のありかた」について講話をいただき、信徒として何を大切に生きていくのがよいのか黙想しました。

- 今後の予定：

3 月 3 日(土)ラビリンスウォークをヨセフホールで行います。ラビリンスウォークは、ラビリンスと呼ばれる中世からある神秘的な模様の上を歩きながら黙想するウォ

ーキングメディテーション(歩く黙想)の一種です。

3月21日(水・祝)には、「四旬節の黙想会」を主聖堂で予定しています。霊的指導は上智大学神学部教授のアイダル神父です。テーマは「教皇フランシスコに学ぶ 祈りとミッション(使命)」です。アイダル神父はアルゼンチンのサン・ミゲル神学校時代、現教皇フランシスコ(当時ホルヘ・マリオ・ベルゴリオ神父)から直接約4年間指導を受けられました。

2)「福音を伝える」グループ:

「福音を伝える」が来年度のメインテーマとなります。今年度はその準備期間としてつぎの活動をしてきました。

- ウェルカムテーブルの常設と運営のための予備調査:
2017年10月14日～16日と11月4日～6日(土、日、月)と2回、朝から夕方まで教会入口と聖堂前に2名、グループメンバーとボランティアの方たちが立ち、来訪者からの質問に答えるという形で、新しく教会へ来る人たちを迎え入れるにはどのような工夫があるのかそのニーズを調査しました。結果は照会件数が526件、そのうち周辺案内は約3分の1、「聖堂に入れますか？」などの教会施設案内が158件もあり、ウェルカムテーブル設置のニーズが確認できました。したがって来年度中の実施を目指します。
- 教会正門からの受け入れ:
外向け看板と聖堂前の立て看板「ご自由に聖堂でお祈りください」などをつくることを広報連絡会に提案を行い、現在作成に向けて検討中です。
- 信徒による入門講座開設の準備について:
東京大司教区では信徒による入門講座を担う人材の養成講座を検討しています。当教会でも教区から要請がきたときに対応できるように人材育成について2018年度に検討する予定です。
- 祈りのカード:
「ミッション2030」の開始と共に始まった毎月の祈りのカードを2018年度も継続しますので、1月の教会活動連絡会議で5月の祈りのカードから作成して下さるようお願いしました。当グループはその調整を指導司祭と共にいたします。
- 2020年東京オリンピック・パラリンピック大会の歓迎体制の検討:
多数の外国からの来訪者が推定されますので、2018年度後半からそのために準備を開始します。
- ミッションの意識化(一人ひとり):
一人ひとりのミッションの意識化を図るために、「福音ワークショップ」を2018年度は5

回、ヨセフホールで13時から、予定しています(4月22日、7月1日、10月28日、12月30日、2月24日)。ワークショップでは指導司祭の講話のあと小グループによる分かち合いなどを通して具体的な状況での対応を考えていきます。

- 防災委員会の再開:

地震への教会の対応を検討した結果、2017年9月の宣教司牧評議会で現行の防災訓練のつぎの段階として教会防災計画の策定が決まりましたので、「福音を伝える」グループから切り離し、別途「防災検討委員会」を発足させました。現在具体的なマニュアルの検討をしています。

3)「共同体を生きる」グループ:

2019年度は「共同体を生きる」がメインテーマになります。これは、この教会が誰にとっても「わが家」であると思えるように、どんな人も迎え入れ、互いに支え合いながら、つながりを大切にしていけることを目指します。その準備の一環として2017年度に取り組みました2つの大きな活動を以下ご紹介します。

- 信徒アンケート

2017年4月24日から5月28日にかけて、当教会で2012年4月1日から2017年3月31日までの5年間に受洗・改宗された成人信徒の方々を対象としてアンケート調査を行いました(幼児洗礼・18歳未満は対象に入っていません)。

対象者923名にアンケートを郵送し、その内24通が宛先不明でもどり、有効アンケート総数は899通となりました。その内、回答があったのは291通となり、回収率は32.4%でした。

アンケートの内容は 1)対象者の属性(性別、年齢、居住地、受洗・改宗年、堅信)、2)受洗・改宗前の教会とのかかわり方(教会を選んだ理由、信仰講座受講の有無など)、3)受洗・改宗後の教会とのかかわり方(ミサ与り状況、活動参加状況、講座参加状況)、4)教会生活について(満足度、信仰の支えとなる仲間の有無、ゆるしの秘跡与り状況、教会維持費、「信仰のしおり」活用状況、教会報購読状況)、5)自由意見。

アンケート結果についてはいろいろな解釈ができると思いますが、だいたいの傾向は読み取ることができると思います。下記に回答があったものについての大まかな内訳をご報告いたします:

- ✓ 属性については、女性が69%、男性31%でした。居住地は東京都(23区・62%と区外12%)が72%でした。年齢的には40代・50代が57%、60代以上が34%、30代7%、20代2%の構成でした。
- ✓ 教会を選んだ理由は知人のすすめが24%、立地の良さ20%、HP・チラシなど9%そしてその他が47%でした。信仰講座を受けた方々が82%でした。ミサの与り方

を講座で教えられた方々が 77%、また教会維持費の納入義務について講座で教えられたと回答された方々が 76%でした。

- ✓ 受洗・改宗後の、ミサの与り状況については複数回答でお答えいただき、総回答数 680 のうち毎週主日のミサに与っている回答が 140、ご復活 134、クリスマスが 149、全く与らないが 13 という状況でした。活動に参加されているとの回答が 82%、講座参加は 55%でした。
- ✓ 教会生活の状況について、満足しているという回答は 57%、ゆるしの秘跡は受けていないという回答が 57%でした。受洗・改宗のときに配る信仰のしおりの活用の有無は活用しているが 48%でしたが、知らなかったが 38%でした。信仰の支えとなる仲間の有無については 74%がいるという回答でした。教会維持費についての問いには 83%が納めているとの回答で 17%が納めていないという結果でした。教会報マジスについて、読んでいるが 80%で、読んでいないが 18%でした。

このアンケート結果を踏まえ回答者の質問をもとに教会生活についての基本的 Q&A 集を作るかどうか検討していく予定です。またスライドでご覧になった円グラフなどについても信徒のみなさんが閲覧できるような方法を工夫したいと思っています。

- ステラ・キッズ・カフェ

2017 年 11 月より「ステラ・キッズ・カフェ」をオープンしました。経済的に恵まれていても家族の絆やコミュニケーションが希薄であったり、複雑な家庭環境であったり、経済的・物質的な要因からではない、心的・霊的貧困からの脱却を目指し、ひとりでも多くの子どもの大切な成長期に備わる当たり前の環境を共に整えることを主眼に置き、「家庭の団欒を求めている全ての子ども達に気軽に立ち寄ってもらえる居場所を提供すること」を目的とし、「ともに食卓を囲む」ことによって、人の温もりや神さまの存在とお恵みをわかちあう、「福音宣教」の取り組みとして発足しました。

小さくされた人々、特に、子どもたちに目を向け、寄り添うことを大切にしていきたいと考えています。参加者を歓迎し、受け入れ、愛をもってお互いを尊重していきます。楽しい団欒とコミュニケーションで、お腹も心も豊かに満たされるカフェとなることを目指しています。

カフェの概要はつぎの通りです：

- ◇ 対象者 : 教会学校を中心にした呼びかけ。
- ◇ 実施方法 : 「食卓を囲む」。食事の準備、調理、後片付けは参加者全員で行う。
- ◇ 実施場所 : パントリー1、テレジアホール等。
- ◇ 開催日程 : 基本的には祝日、夏休み、冬休み、春休みなどを利用して実施。
14:30~18:45 (14:30~準備と調理、17 時頃から食事、18:20 頃から後片付け)

- ◇ 開催規模 : 5 名から 10 名の参加者を想定。
- ◇ 運営資金 : 賛同者からの献金、献品等のカンパ。(参加人数がその都度変わるの
で現在のところ食料品などの献品はご遠慮させていただいております)

これまで 3 回カフェを開きました。実施状況はつぎの通りです:

- ◇ 2017 年 11 月 3 日(文化の日): 7 名の子どもが参加。メニューは秋鮭と季節のお野菜のホイル蒸し、炊き込みご飯、豆腐とワカメのお味噌汁、フルーツ杏仁豆腐。
- ◇ 2017 年 12 月 28 日(木・冬休み)実施: 9 名の子どもが参加。メニューはホワイトシチュー、ナスとトマトのグラタン、フランスパン、パネトーネとシュトレン。
- ◇ 2018 年 2 月 12 日(建国記念日・振休)実施: 9 名の子どもが参加。メニューは焼き餃子、カボチャとキュウリのじゃこサラダ、カニカマ卵ワカメの中華スープ、白ご飯、手作りチョコレートパイとイチゴ。

なるべく季節の食材を使って、調理を通してのコミュニケーションを楽しんでいます。調理に興味がない子どもたちにはスタッフリーダーと食卓の準備をしたり、宿題をしたりして過ごしています。

最後に賛同者のみなさまの温かいお言葉とご寄付にスタッフ一同心から感謝しております。次回の「ステラ・キッズ・カフェ」は 4 月 30 日(昭和の日・振休)に予定しています。

4. 「新しい『きょうどう』」グループ:

2020 年が新しい「きょうどう」グループの担当する年となります。基本的コンセプトは 2017 年度に始まった「祈りを深める」グループ、2018 年度の「福音を伝える」グループ、2019 年度の「共同体を生きる」グループの活動を踏まえて、2030 年に向かって「きょうどう」のありかたを考え実現していきます。平仮名の「きょうどう」にした理由は、漢字では、「共同」、「協働」、「協同」などありそれぞれ意味が限定されてしまうからです。

私たちは「きょうどう」を横と縦の連携を軸として考えて行きます:

- 横の連携:

イエズス会教会使徒職委員会拡大会議を通してイエズス会 4 教会(山口教会、祇園教会、六甲教会、聖イグナチオ教会)と連携し、2030 年に向けての共通認識を持っていくことを決めています。その一環として 2017 年 11 月 16 日から 2 日間、広島長束黙想の家でイエズス会教会使徒職委員会拡大会議が行われ、お互いに 4 教会共通課題を洗い出し、解決に向けて相互に協力し連携していくことを再確認しました。

当教会では教会報マジス 2016 年 12・1 月合併号から 2017 年 2 月号、3 月号で各教会を紹介しました。さらにインターネットを利用したウェブ会議を 2 月 17 日に行い、4 教会共通のロゴマークの案を検討する予定です。今後もさらにウェブ会議を発展させていろいろな教会の集いや行事等も分かち合っていきたいと考えています。たとえ

ば 5 月には山口教会を通して津和野乙女峠まつりの紹介をすることなど検討していません。

さらに東京教区中央・千代田宣教協力体(築地教会、神田教会、大島教会、聖イグナチオ教会)においても教会の規模は違っていますがかかえている課題は共通なものが多いので、当教会の担当評議員と密接に連携して共通の課題の克服に向けて協力していくことが考えられます。

- 縦の連携:

今後司祭の数が減少していくことは明らかですので、現在の教会活動や運営の方法の見直しが必要となります。「少ない司祭で教会を支える」という共通認識をもち司祭と信徒の役割をしっかりと把握したうえで、新しい「きょうどう」を構築していかなければなりません。

そのヒントはキリシタン時代にあるかも知れません。そこで 11 月の教会黙想会は「祈りを深める」グループと協働し、キリシタン史に詳しい上智大学史学科の川村信三神父に「キリシタン時代に学ぶ教会生活のありかた」をテーマに指導をお願いしました。2018 年度にはさらにキリシタン時代の信徒のありかた、信仰の継承などについて講演会などを企画したいと思います。

4 月からは「福音を伝える」がテーマとなります。ワークショップを通して司祭減少時代における信徒の役割などを学び、またイエズス会 4 教会、東京教区中央・千代田宣教協力体との連携を一層深めて行きたいと考えています。

5. 使命(ミッション)について—英 隆一朗神父の講演

今回のセミナーが 2017 年度の最後の講演になります。この講演テーマを「使命(ミッション)」としたのは、「祈りを深める」からつぎの「福音を伝える」への架け橋とするためです。1 月のセミナーでは「召命」、神からの呼びかけと私たちの応答について話をしましたが今回は私たちが「召命」をしっかりと受けとめること、つまり「使命」について話します。

配付資料の 1. にある From Vocation to Mission のところをご覧ください。この意味は神の呼びかけ、召命 (Vocation) に応えて神から遣わされていく (Mission) ということです。ふだん私たちは「ミサ」ということばを使いますが、このことばは、ラテン語ミサの終わりの「Ite Missa Est」と司祭が会衆に向かって言う派遣の挨拶に由来します。つまり私たちが「神に命を召され、神のために命を使うように派遣される」ことなのです。

「福音を伝える」とは「召命と使命」の統合した生き方です。そして私たちは使命と聞くとすぐに何か特別のことをする活動を考えがちですが、行動する前に「いかにあるか・いかに生きるか」(Being)、「心のありかた」、「生き方の方向性」をしっかりと考えることです。

それから「何をするか」(Doing)へと移って行くことになると思います。

では、「使命の領域」、私たちが使命を果たす場所は何処になるのでしょうか。それは私たちの日常生活の中で 100%神から召された命を使うことです。月曜日から土曜日まで「自分がいかに使命を生きているか」ということです。日曜日に福音を感じ仲間とわかちあうことです。ふつう一般の人にとっては家庭や働く場、たとえば会社が使命となっていると思います。いま置かれたところでいかに神の平和を作るかということではないでしょうか。またライフステージによってもそれぞれ違った使命(ミッション)があり、それをしっかりと生きて行くことだと思います。使命、自分のありかたが変わることも当然あることです。

教会奉仕を例にとれば信徒全員が教会奉仕をすることは理想ですが、人にはそれぞれ神がくださった賜物がありそれを生かす場は違うと思います。実際 20%ぐらいの人が教会奉仕に携わってもすごいことになります。また社会の特別な奉仕の場合でもやはり 20%ぐらいではないでしょうか。

どこに呼ばれ、どの使命を果たしていくかについてはマタイの福音書が参考になると思います。マタイには 5 つの説教があり、10 章はミッションの心がまえをよく教えてくれます。この章にはイエスが弟子に呼びかけ、使命を与えるダイナミックな対話が展開されています。ぜひこのマタイ 10 章のそれぞれの文節をゆっくり読み、つぎの二つの点を静かにふりかえってみてください：

- ①私は今、どこに遣わされているだろうか。主イエスはどこに遣わしているか。
- ②そこで、どう生きるように、何をするように、主イエスは望んでおられるだろうか。

最後に神の呼びかけに応え使命を実践された人を紹介します。ひとりには佐藤初女^{はつめ}さんです。もうひとりには聖フランシスコ・サレジオです。

「森のイスキア」の主催者あるいは日本一のおむすび名人といえはご存知の方も多と思います。悩みや苦しみなどをもって来る人たちを受け入れ、おむすびを作り食事を通して彼らの悩みや苦しみを癒やしていました。彼女のことを日本のマザー・テレサという人もいます。

実は、私も彼女を訪ねておむすびをいただきお話を聞かせていただいたことがあります。彼女は、はじめ小学校の先生でした。その後、悩みや苦しんでいる人たちのために自宅を開放し彼らを受け入れていましたが、1992 年、岩木山麓に「森のイスキア」を建て、悩んでいる人たちをそこで受け入れ彼らの再出発の手助けしていました。

佐藤さんはカトリックの洗礼をうけたキリスト者です。ほんとうは教会で「イスキア」的仕事をしたかったそうですが、出来なかったのが、新たな試みとしてご自分で「イスキア」を始められたそうです。「イスキア」はイタリアのイスキア島に因んでつけたそうです。イスキア島は自然が豊かで温泉もあり、数多くの病が癒やされたとの伝説があるところです。

彼女のしていた活動は、教会の中ではこれほど広まることはなかったと思います。むしろ外に出ることによって大勢の人たちに福音を伝えることができたのだと思います。彼女は難しい説教をしたわけではなく、唯々困っている人、悩んでいる人たちの話を静かに聴き、おむすびと漬物と味噌汁の食事を通して彼らが問題を解決するのを支えていたのです。残念でしたが彼女は2016年2月1日に帰天されました。しかし「森のイスキア」は現在も続けられており、各地で小さな森運動が広がっているようです。神からの呼びかけに応え使命を(ミッション)を果たされた方です。

もうひとりには聖フランシスコ・サレジオです。よく彼は、名前が同じなのでサレジオ会の創立者として間違われますが、サレジオ会はドン・ボスコが始めた社会的に困っている青少年のための修道会です。サレジオの名前はドン・ボスコが柔和の聖人フランシスコ・サレジオを尊敬していたからです。ドン・ボスコは、聖フランシスコ・サレジオの有名なことば「ハエを捕まえるためには、酸っぱい酢の一樽よりも、蜜の一滴のほうが効果がある」という祈りをよく唱えていたそうです。

資料の「信心(祈りと使命として)の心得」を読んでください。ここではだれでも、どんな生活の中でも、神の呼びかけを聴き、使命を見つけ、キリスト者として生き生きと生活ができると書かれています。とくに2頁中央にあるつぎの箇所は私たちの召命と使命に大きな勇気を与えてくれます：

「ミツバチは蜜を集めるとき、花を少しも傷めない。花は以前と少しも変わらず、触れられた気配もなく新鮮なまま残る。だが真の信心はそれよりもはるかに見事なことをするのである。それは信心がどんな召し出しも、また何の仕事も損なわないだけでなく、かえってそれを飾り、いっそう美しくする。」

5. その他

「祈りのセミナー」は2月のセミナーをもって終わりとなります。教会の年間予定表では3月11日に祈りのセミナーが記載されていますが中止になっておりますのでご注意ください。

以上

文責：英神父とミッション2030促進チーム

資料

使命(ミッション)について

1. from vocation to mission: 神の呼びかけを聞き、神から遣わされていく
召命から使命へ: 神に命を召され、神のために命を使うように

2. 使命=いかにあるか・いかに生きるか(Being)

> 何をするか・活動(Doing)

3. 使命の領域

日常生活(仕事・家庭) 100%

教会内の奉仕 20%

社会の特別な奉仕 20%

4. ミッションの心がまえ(マタイ 10 章)

10-1 イエスは十二人の弟子を呼び寄せ、汚れた霊に対する権能をお授けになった。汚れた霊を追い出し、あらゆる病気や患いをいやすためであった。

10-5 イエスはこの十二人を派遣するにあたり、次のように命じられた。「異邦人の道に行ってはならない。また、サマリア人の町に入ってはならない。10:6 むしろ、イスラエルの家の失われた羊のところへ行きなさい。

10-7 行って、『天の国は近づいた』と宣べ伝えなさい。

10-8 病人をいやし、死者を生き返らせ、重い皮膚病を患っている人を清くし、悪霊を追い払いなさい。ただで受けたのだから、ただで与えなさい。

10-9 帯の中に金貨も銀貨も銅貨も入れて行ってはならない。10:10 旅には袋も二枚の下着も、履物も杖も持って行ってはならない。働く者が食べ物を受けるのは当然である。

10-11 町や村に入ったら、そこで、ふさわしい人はだれかをよく調べ、旅立つときまで、その人のもとにとどまりなさい。10:12 その家に入ったら、『平和があるように』と挨拶しなさい。10:13 家の人々がそれを受けるにふさわしければ、あなたがたの願う平和は彼らに与えられる。もし、ふさわしくなければ、その平和はあなたがたに返ってくる。

5. 一人ひとりへの質問(ふりかえりのポイント)

① 私は今、どこに遣わされているだろうか。主イエスはどこに遣わしているか。

② そこで、どう生きるように、何をするように、主イエスは望んでおられるだろうか。

6. 信心(祈りと使命として)の心得

神は万物を創造されたとき、草木がそれぞれの種に従って実をつけるようにお定めになった。教会の生ける草木であるキリスト者にも、神はその身分と召し出しに応じて信心の実を結ぶようお命じになるのである。

貴族、職人、使用人、君主、寡婦、未婚の女子、主婦などは、それぞれの身分に応じて信心を実践しなければならない。また、信心はそれを行う人の能力、仕事、義務に適したものでなければならない。

フィロテアよ、司教がカルトゥジオ会士のように隠遁生活をしようとしたり、夫婦がカプチン会士のように何の財産も持たずとするのは適当なことだろうか。職人が修道士のように終日聖堂にこもり、修道士が人の世話をするために、司教のようにだれかれの別なく対応するのは当を得たことであろうか。そのような信心は愚かしく、常軌を逸し、認容できないものではないだろうか。

だが、こうした取り違えは珍しくないのである。フィロテアよ、真実な信心であれば何ものも損なわず、あらゆるものを完成する。そして、もし信心がその人の正しい召し出しに反するものであれば、確かに間違った信心なのである。

ミツバチは蜜を集めるとき、花を少しも傷めない。花は以前と少しも変わらず、触れられた気配もなく新鮮なまま残る。だが、真の信心はそれよりもはるかに見事なことをするのである。それは、信心がどんな召し出しも、また何の仕事も損なわないだけでなく、かえってそれを飾り、いっそう美しくする。

宝石を蜜につけておくと、それぞれの石のそれぞれの色が輝きを増してくるように、信心を自分の召し出しに合わせる人は、その召し出しをさらによく果たすことができるようになる。信心があれば、いっそう平和な心で家族のことを配慮することができ、夫婦の愛情がいっそう誠実になり、君主への奉仕はさらに忠実になり、あらゆる仕事はこれまでよりも楽しく快いものとなるのである。

兵営や工房、君主の宮廷や夫婦の家庭から信心生活を締め出すのは間違いであり、異端である。フィロテアよ、純粋な観想生活に固有の信心、隠遁生活、あるいは修道生活に固有の信心が、こうした場所で実践できないのは無理もない。しかし、これら三つの信心の形の他にも、世間であってさまざまな暮らしをしている人びとを完成に向かわせる、さまざまな信心生活の形もある。

だから、私たちはどこにいても完全な生活を望むことができるし、またそれを望まなければならないのである。

聖フランシスコ・サレジオ『信心生活入門』